

新 歌人群像

大西民子

ひとすじの道

真鍋正男



一 民子の原風景

大西民子は大正十三年五月八日、盛岡市八幡町に生まれた。チャグチャグ馬コの八幡宮や全国屈指の馬市で知られた町だ。父は盛岡警察署の敏腕刑事で、母のほか姉と妹がいて五大家族が仲良く暮らしていたのだろう。

うち揃ひ夕餉なしたる日のありき小さき額の絵のごとく見ゆ

〔風水〕

という一首に、昭和初期の一家の団欒の様子が偲ばれる。短歌との出会いは、昭和九年、盛岡市立城南尋常小学校三年生のころ。天満

宮に石川啄木の歌が台座に彫られた真新しい狛犬が一對、他に歌碑が一基あったという。

昭和十二年四月、民子は、盛岡高等女学校に入学した。二年生ころから、啄木歌集を愛読し、近隣に残る啄木の足跡を訪ねるようになった。やがて指折り数えてうたを作りはじめ校友会の雑誌に発表することもあったらしい。川村查平の評論「無告のうた―大西民子論」（『北の文学』平成六年十一月号）には、民子の当時のうたが紹介されている。

わが母校小学校の鐘の音きこえて懐かし昼の休みに

という一首で、新任の国語教諭が褒めてくれ

「波濤」創刊号のゲラを見る（平成5年12月）



盛岡高女卒業のとき（昭和16年3月）

それで作歌に夢中になったりしたようだ。

奈良女子高等師範学校（国語漢文専攻）に入学したのは昭和十六年。古典や国文学を優れた教授たちから学ぶことができ、また生徒会の短歌会を通して、前川佐美雄の指導を受けることもできた。奈良での約四年間は歌人としては最良の、英才教育を受けていたのである。「写真のようなうたでなく絵のように歌うこと。見たままではなく感じたままを歌うのだ。強いられて戦争の歌など詠んではない。」という佐美雄の言葉はうたの方向を決定付けた。また、齋藤史の『魚歌』から影響を受けたのも奈良女高師のころである。

はまなすの花も吹かるる潮風にゆれやすかるはこころなりけり

帰省の折に詠んだうたを佐美雄は「美しいよ」といつて励ましてくれたという。

その後、民子は、戦争の激化で女高師を繰り上げ卒業、昭和十九年に岩手県立釜石高女教諭となり、昭和二十二年結婚、翌二十三年には男子を早死産。二十四年には埼玉県大宮市に移住、県立文化会館に勤務。文化団体事務等を担当し俳句連盟や歌人会の事務局を務め、県内在住の文学関係者と広く接するようになった。

短歌では、昭和二十二年、関登久也主宰の「歌と随筆」に投稿、選者の木俣修の選で特別作品が入選したこともあり「冬曆」を執筆。十四年木俣修門下に加わり修の指示で岩上とわ子主宰の「朱扇」の編集助手を務めるようになった。「朱扇」は、修と中西悟堂が顧問の女性だけの結社誌だったが、小説家や俳人などの寄稿もあり文芸の香り高い雑誌だった。昭和二十五年には日本野鳥の会主宰の「御岳詩歌人探鳥会」が開かれ、「朱扇」のメンバーとともに民子も参加したりしている。「朱扇」には作品のほか民子の古典文学評論も掲載されている。ことに「芭蕉の風雅」は、民子の道を暗示する評論だ。昭和二十八年、「朱扇」は終刊。同人社友は木俣修主宰の「形成」創刊にあげて参加し、舞台は「形成」に移るのである。

二 うたの曼陀羅

かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は 『まぼろしの椅子』

昭和三十一年に出版された『まぼろしの椅子』は、帰らぬ夫を待つ悲しみをひたすらうたった歌集だったが、作者が職業をもつ知的女性という点もあり、「女の生き方を問う」歌集として大きな反響を呼んだ。その後、超結社の「青年歌人会議」に属し、同世代の歌人から刺激を受け、「文学として成り立つ短歌」を模索し、うたの主体となる「私」を拡張する道を追求するようになった。「風景を歌うことで内面の荒涼を表現できないか」「ゆめをえがくことで満たされない欲求を歌うことはできないか」その二つの試みを「掟」として自らに課した。

完きは一つとてなき阿羅漢のわらわらと起ちあがる夜無きや 『不文の掟』
手に重き埴輪の馬の耳ひとつ片耳の馬はいづくにをらむ

成果は三十五年「不文の掟」に纏められた。心の荒涼をえがくため、軽井沢、鬼押し出し

大西民子

に年に幾度も通ったのもこの時期である。歌集は日本歌人クラブ推薦歌集となった。

てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ
傷より花こぼれ来る
『無数の耳』

昭和四十一年「無数の耳」では、さらに心理主義傾向を深め独自の世界を確立した。その後、言葉に細心の注意を払い、表現の深化と拡張の試みを怠らなかつた。以後、約五年置きに歌集を纏め続けることになる。

降りやまぬ雨の奥よりよみがへり挙手
の礼などなすにあらずや
『花溢れぬき』
ひとすぢの光の縄のわれを巻きまたゆるやかに戻りてゆけり

四十六年に「花溢れぬき」が刊行されたあと民子の暮らしに過酷な運命が襲いかかった。

円柱は何れも太く妹をしぼしぼわれの
視野から奪ふ
『雲の地図』

昭和五十年の「雲の地図」は、たった一人の肉親であり、民子の作歌活動を長く支えてくれていた妹を失った時期の慟哭の歌集だが、追慕の挽歌の中に、同時に

青みさす雪のあけほのきぬぎぬのあは
れといふも知らで終らむ
『雲の地図』

などのつややかなうたが紡ぎだされていることも忘れてはいけない。

道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの
決めたる高さに揃ふ
『野分の章』

天涯孤独となった民子の作品はさらに純度をたかめていく。「造化にかへれ」という芭蕉の言葉に従い、大自然の前に無心でありたいと願うようにもなっていた。「野分の章」がまとめられたのは昭和五十三年である。

亡き人のたれとも知れず夢に来て菊人
形のごとく立ちあき
『風水』

生死を見つめる民子の眼には凄味が感じられる。五十七年「風水」で追空賞を受賞した。

死のときはたれもひとりよまひまひは
一粒のまま目の暮れむとす
『印度の果実』
霊柩車を先立ててゆくバスのなか不意に時刻を問ひし人あり

昭和五十八年、長く師事した木俣修を失い、民子は吉野昌夫とともに「形成」の編集責任者となり、病を得て公務員を退職。六十一年



釜石高女教諭時代、前列中央（昭和22年4月）

に刊行された「印度の果実」はそのころの作品をまとめた歌集である。

ねんごろの見舞ひなりしが去りぎはに
人のいのちを測る目をせり
『風の曼陀羅』

民子の体は病に蝕まれていたが、用心を重ねながら作歌や選歌、後進の指導にあたっていた。欲も得もない民子の目には生死の間や人の動きがよくみえていたのだろう。自らの手でせめてもう一冊と編んだ「風の曼陀羅」は、平成四年、日本詩歌文学館賞を受賞した。

三 素顔の民子



中島やよひ氏と（平成2年7月、中島氏歌集刊行のとき）



日本詩歌文学館賞受賞のとき、鬼剣舞のお面をかぶる（平成4年5月岩手県北上市）

大西は歌論を纏めなかった。理屈ではなくつねに実作で意図するものを伝えようとしていたのだ。そのかわり、自歌自注は多い。自注でも理屈は述べず、歌の背景や成り立ちを家族や離婚した夫との個人生活から語るが多かった。そのため、うたは分かりやすくなるが、本来の文学的な鑑賞よりも、スターの自伝のように、作品と作者が分離しないまま、私生活への興味に流れる弊害もあったと

思う。自歌自注は、大西が自ら書いた歌物語なのだ。晩年の作品にも相聞（せうもん）ととれるうたがあるが、それは、別れた夫に捧げたものではない。にもかかわらず、歌物語に通じた読者は想像を膨らませてしまふ、深奥はともかく大西民子の生活はそれほど孤独であったわけではない。こころゆるした門下も少なからずいた。話術が巧みで、透き通った声には人を酔わせる魅力があった。ユーモアもあり、シニカルなところや、お茶目なところもあって周囲には笑い声がたえなかった。「大西さんて何てさびしい生活だろう、どこへも行けなくて思われているようなのですが、ご当人はそんなでもないのだからふしぎです。机に向かって読んだり書いたりしているのが一番好きです。」（書簡）控えめではあったが精神は強靱（たけなげ）で豪胆（たけなげ）といえるほど腹はすわっている。うべきときには、毅然（きぜん）としてものがいえる歌人だった。だから、多くの歌人に好かれ、信頼され、慕われていたのである。

「毎日くらくらしながら図書館へ通っていて、今日だけは朝から涼しくしていられることが、ひどくしあわせに思えるような日曜日です。少し早起きして昨夜洗ったおいた大物を干しました。あおがなくてももの乾くしあわせもありました。歌がどんどん深くなっていくのね。余り深みにはまってほしくないけれど、歌って本当は哲学を築いていくことなのだろうと思います。せばめないようにだけはしていらして下さい。美しいものは美しいと見る目は持っていたい。お元気に。鯉（こい）たちは元気にしていますか。」

「歌をつくることは現実の模写ではなくても一つの世界を創（つくり）ることだと、少女のころ、『魚歌』を読んで学びました。言うは易く、行（な）うは難（た）しでした。五十年近くも、続けてきて。でもこのごろどこへでかけなくとも少しずつ風景が見えるような感じがして来ました。見えるものを見尽くしてしまわないと見えないものは見えてこないのかもしれないと。門下への書簡の一部である。

とどこほる雲のごときは差し措（さ）きて力ある者走り続けよ
「光たばねて」

平成六年一月、大西が編集発行人となった『波濤（はとう）』の創刊号に掲載された作品。単に門下へのみ呼びかけたものではない。うたを愛するすべての歌人にあてた民子の最後のメッセージだろう。平成六年一月五日、民子はうたひとすじの生涯を終えた。享年六十九歳。ベッドには静かな音楽が流れていたと聞く。

（まなべ・まさお「波濤」編集責任者）